「口腔機能実地指導料に係る研修会」受講レポート

口腔機能管理とは

「食べる」「話す」「呼吸する」といった日常生活に欠かせない機能を維持・改善し、健康寿命の延伸や健全な成長発達を支えるために行うものである。対象となる主な疾患には成人・高齢者に多い口腔機能低下症と小児にみられる口腔機能発達不全症がある。

１．口腔機能低下症（主に５０歳以上の成人・高齢者）

加齢や疾患、生活習慣などにより口腔機能が複合的に低下している状態である。主に 50 歳以上の成人・高齢者が対象となる。放置すると低栄養、誤嚥性肺炎、フレイル・サルコペニア、会話量の減少、社会参加の低下、QOL の低下などにつながる可能性がある。

２．口腔機能不全症（１８歳未満の小児）

食べる・話す・呼吸するといった口腔機能の発達が十分でない状態のことである。主な原因には口呼吸、指しゃぶり、舌突出癖、偏食、柔らかい食事の増加、姿勢不良、哺乳・離乳支援不足などがあり、放置すると歯列不正、顎顔面の成長不良、睡眠障害などに繋がる可能性がある。

歯科衛生士の役割

歯科衛生士は口腔機能管理におけるキーパーソンである。問診・スクリーニング、日常会話や診療時の観察、検査の実施、結果の説明、トレーニング指導、継続的な評価と記録、歯科医師や歯科助手、受付との連携を担っている。重要なのは検査をして終わりにするのではなく、患者さんとの行動変容を支援することである。

まとめ

口腔機能管理は検査することが目的ではなく、「食べる」「話す」「呼吸する」といった日常生活を支え、患者さんの健康寿命や健全な成長発達に繋げることが目的である。歯科衛生士は日常診療の中で患者さんの小さな変化に気づき、継続管理できる方法を一緒に考えながら支援する重要な役割を担っている。

また今回の研修会を受講して、現在の自身の日々の診療においては歯周治療が中心になっており、口腔機能管理にあまり意識を向けられていないため、まずは患者さんの姿勢やうがいの様子など日々の診療の中の何気ない行動を観察するなど身近なことから取り組んでいき、口腔機能管理を通して患者さんの健康をよりサポートしていきたい。